

9-5

主題	施設内情報共有システムとケアプランの連動について
----	--------------------------

ケアプラン	副題 職員の気づきを重視したケアマネジメントによる利用者支援の向上をめざして
情報共有化	

研究期間	24ヶ月	事業所 特別養護老人ホーム 九十九園

発表者：小川 篤史、浅田 友理子

アドバイザー：

共同研究者：春日 大河、瀬川 綾子、山浦 宣洋

電 話	0428-74-5105	メール	3-north@busonkai.com
FAX	0428-74-4715	URL	

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	特別養護老人ホーム九十九園は昭和47年7月に開設され、その後平成17年8月に新しくユニット型個室の特別養護老人ホーム定員100名と短期入所生活介護事業定員10名をオープンしました。緑豊かな青梅市にある施設です。
------------------------------	---

《研究前の状況と課題》

- 平成19年9月より九十九園で独自に開発した情報共有システム“気づき”の運用を開始。
- 支援経過記録などの利用者情報の共有については一定の成果を得られていたが、ケアプランに関する情報共有が遅れていた。
- ケアプランが形式的なものになりがちで、個別ケアに活かしきれていなかった。
→職員のあいまいな記憶力に頼ったものになっていた。
- ケアプランが簡単に閲覧できないため、ユニット担当者以外の職員に伝わりづらい状況。
- ケアプラン作成時の転記作業が多く、居室担当職員の負担が大きくなっていた。
- 根拠のない意見でケアプランが作成されてしまい、結果としてケアプランを重視しないことにつながっていた。
- 支援経過記録がケアプラン改善に十分つながらない状況があった。

《研究の目標と期待する成果》

- 職員がよりケアプランに基づいた根拠(エビデンス)のある個別ケアを提供できることに期待してシステムの改善に取り組んだ。
- 職員の気づきの質が向上するよう職員研修に取り組んだ。
- ケアプラン作成時の転記作業が減るよう現状分析を行い、ケアプラン作成の流れの再構築に取り組んだ。
- ケアプランが閲覧しやすくなり、部署を超えた利用者支援が行なえることを期待し、画面のデザインに取り組んだ。
- 職員のやりがいの向上に期待し、ニヤリハット(プラス面の気づきの収集)の取り組みを情報共有システム上で行った。
- 支援経過記録を基にケアプランが改善されるようなシステムの改善に取り組んだ。

《具体的な取り組みの内容》

- ・ ケアプラン担当者を中心にプロジェクトチームを編成。問題点を話し合い、それまで使用していた情報共有ソフト“気付き”の中にケアプランを組み込めないか検討した。
- ・ 九十九園情報共有化のアドバイザー村井祐一教授(田園調布学園大学)に協力を仰ぎ、それまで九十九園で使用していた書式を基に、システム化を検討した。
- ・ ケアプランが入力・閲覧しやすい画面をデザインした。
 - ①ケアプラン入力・閲覧画面
 - ②気付き入力画面
 - ③気付きケアプラン連動ボタン
 - ④個人課題別気付き一覧画面
- ・ わかりやすいマニュアルを作成した。
→現場が使いやすいマニュアルを自分達で作成した。
- ・ 施設内外に向けた発表を行なった。
→開発を後押しする結果に。
- ・ 情報共有システム“気付き”を活用するための職員研修を実施した。
- ・ 平成22年1月より、情報共有システム“気付き”ケアプラン連動バージョンの運用を開始した。
- ・ ニヤリハットの取り組みをシステム上で行った。
- ・ システムの効果に対するアンケートを実施した。
→導入前と導入後6ヶ月
- ・ アンケートを基に、情報共有システム“気付き”の改善を行なった。
→マニュアル・ソフトの使い勝手の見直し。

※倫理的配慮に関しては、調査の目的とプライバシーの遵守を依頼時に口頭で約束している。

《取り組みの結果と評価》

- ・ ケアプランについて、形式的で、あいまいな記憶に頼りがちだったものが、簡単に確認できるようになり、ケアプランに基づいた介護(個別ケア)が実践できるようになった。
- ・ よりケアプランを意識した“気付き”が増え、結果として気付きの質が向上した。
- ・ ニヤリハットがケアプランに反映されるようになった。→職員のやりがいが増えた。
- ・ 転記作業を大幅に減らすことができた。
→最大5回の転記が1回の入力に。
- ・ ケアプランを共有することで、経験年数やセクションを超えた利用者支援の視点を共有できるようになった。
- ・ 再アセスメント時に“個人課題別気付き一覧”を参考にすることで、根拠(エビデンス)のあるケアプラン作成につながった。
- ・ 短期入所生活介護利用者のケアプランも閲覧しやすい環境が整った。利用者を理解し安心して仕事ができるため、稼働率向上にもつながった。

《まとめ》

形式的なものになりがちだったケアプランをITシステムに組み込むことで、職員一人ひとりの気付きの質が向上し、更に利用者支援向上のために生かせるようになった。

今後は、①24H シートとの連動性の向上

②ご家族へ向けた分かりやすい資料提供
といった課題に取り組んでいきたい。

《参考文献》

「利用者支援向上のための社会福祉施設・事業者の情報化 村井祐一著」(東京都社会福祉協議会)

「福祉・介護の情報学—生活支援のための問題解決アプローチ 日本福祉介護情報学会編」(オーム社)

《提案と発信》

ITシステムを活用した情報共有化を進める上で重要なことは、単に記録の手間を省くということに止まらず、職員一人ひとりの気付きの質の向上などのプラス面の効果も期待できることであると考えます。ITシステムに業務を合わせるのではなく、業務の必要な部分を補う道具(ツール)の一つとして活用し、今後も個別ケアの実践や利用者一人ひとりのQOLの向上につなげていきたい。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。